埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

The Piano Collection “Aus der Musikstadt” (1892) as an Exhibition of the Contemporary Viennese Music

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若宮, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/303

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

博覧会的なピアノ曲集としての“Aus der Musikstadt”(1892)

The Piano Collection “Aus der Musikstadt” (1892) as an Exhibition of the Contemporary Viennese Music

若　宮　由　美
WAKAMIYA, Yumi

“Aus der Musikstadt” is the piano collection by ten composers who lived in the 19th century in Vienna, and it was published by Viennese Gustav Lewy in 1892. The composers were Josef Bayer, Alfons Czibulka, Johann Nepomuk Fuchs, Robert Fuchs, Joseph Hellmesberger jun., Karel Komzák jun., Carl Millöcker, Adolpf Müller jun., Johann Strauss jun. and Franz von Suppé. The title of each short piece was designed beautifully and the composer's portrait was also drawn on the side of the title. The score puts prominent composers in order seems to be an musical exihibition. “The International Exhibition of Music and the Theatre” was just held in Vienna in 1892. With the Exibition the concept which treats music as goods was born. In that sense, a score was not only for a performance but also a souvenir. It seems that the collection was related to the Exhibition, because it was not so expensive and good-looking, and it looks like a famous composers’ exihibition.

1　序

1892年、ウィーンの楽譜出版社グスタフ・レーヴィGustav Levy（1824-1901）は、“*Aus der Musikstadt*（音楽の街から）”と題するピアノ曲集を発売した（以下、同曲集を『音楽の街から』と記す）。この曲集には、ウィーンで活躍した10人の作曲家によるピアノ曲が収められている。この時代、すなわち19世紀末には、しばしば愛奏・愛唱曲集の形態で複数作曲家の作品を収めた曲集が販売された。しかし、『音楽の街から』の構成はそうした曲集とは性質を異にする。10人の作曲家の中に、ピアノ曲を作曲したこと自体がほとんど知られていない作曲家がいる点も注目に値する。そこで、(1) 誰がピアノ曲集を計画したのか、(2) なぜ収載作曲家が選ばれたのか、(3) 収載曲の由来を考察していきたい。それにより、曲集の性質と制作意図が明らかになるであろう。

2　楽譜装丁とデザイン

『音楽の街から』は1892年に出版された。楽譜表紙に出版社名と住所は明記されているが、出版年は楽譜のどこにも記されていない。しかし、ドイツの楽譜商ホフマイスターが刊行した1892年５月の販売目録に『音楽の街から』が掲載されていること[1)]や、出版社のプ

キーワード：ヨハン･シュトラウス、グスタフ・レーヴィ、国際音楽演劇博覧会
Key words ：Johann Strauss, Gustav Lewy, the International Exhibition of Music and the Theatre

レート番号（G.L.II.600）から、1892年の出版は確定されている。

次に、楽譜の装丁についてみてみよう。楽譜表紙には、以下のように記されている。“Aus der Musikstadt. Zehn Compositionen für Pianoforte zu zwei Händen.”。つまり、『音楽の街から』という題名（デザイン化された文字で左下から右上に書かれている）の右脇に、小さく「10曲の２手用ピアノ作品」とあり、その下に10人の作曲家の名前が列記されている。曲集名の上部に描かれた女神は、左手に竪琴を持ち、右手で月桂樹の冠を高く掲げている。さらに、表紙左には燭台が描かれ、そこにウィーン市の紋章が下げらている。表紙をめくった２頁目は白紙、３頁目に目次があり、作曲家名と曲名が記されている[2)]。

４頁目からが楽譜であり、短い曲は1頁、最も長い曲で４頁の長さである。楽譜は全25頁。各曲の冒頭には作曲家の肖像画が描かれ、曲名・作曲家名を飾るように各人に異なる花がデザインされている[3)]。肖像画とデザインは単色刷りである。楽譜表紙だけでなく、各曲のタイトル部分に肖像画を付した装飾は、当時の廉価楽譜には珍しい[4)]。

３　作曲家の経歴と収載曲の由来

『音楽の街から』の収載曲を**表１**に示す。この曲集では、表紙、目次、曲の冒頭の３箇所に作曲家名が記されているが、綴りが一致していない人もいる。例えば、第２曲のツィブルカは、表紙と目次で“Czibulka”、楽譜冒頭で“Csibulka”と綴られている。また、第３曲のフックスは、表紙と目次で“Hans Fuchs”、楽譜冒頭では“J.N.Fuchs”となっている。このことから、現代的な意味での楽譜の厳密さとは、別の価値観のもとに制作されたことがわかる。10人の作曲家の経歴と収載曲の由来について考察を進めていく。

3.1　ヨーゼフ・バイヤー〈ジャワの踊り〉

バイヤーJosef Bayerは1852年３月６日ウィーン生、1913年３月12日ウィーン没。1885年宮廷歌劇場バレエ音楽監督に就任し、終生同職にあった。バレエ音楽監督である彼の代表作はバレエ作品であり、《ウィンナ･ワルツ *Wiener Walzer*》（1885）や《ウィーン巡り *Rund um Wien*》（1894）に、ウィーンを代表する昨今の作曲家のモティーフを数多く引用した。引用作曲家に、シュトラウス２世やミレッカーが含まれる。1892年にはシュトラ

表１　『音楽の街から』の収載曲と基本データ

曲順	作曲家	曲　名	原　題	曲種	調性	拍子	小節数
1	バイヤー	ジャワの踊り	Javanesischer Tanz	*****	F	3/8	119
2	ツィブルカ	高原の酪農小屋で	In der Sennhütt'n	レントラー	C	3/4	71
3	J.N.フックス	メヌエット	Menuett	メヌエット	Bb	3/4	70
4	R.フックス	カノン風小品	Canonisches Stücklein	カノン	Bb	2/4	117
5	ヘルメスベルガー２世	子どもたちのガヴォット	Gavotte d'enfants	ガヴォット	D	2/4	59
6	コムザーク２世	ロマンツェ	Romanze	ロマンツェ	F	4/4	30
7	ミレッカー	スルタンが来るぞ！	Der Sultan kommt!	行進曲	a	2/4	80
8	ミュラー２世	はなむけに	Mit auf den Weg	*****	A	2/4	29
9	J.シュトラウス２世	悩みごと	Problem	ワルツ	a	3/4	81
10	スッペ	孤独な雀	Der verlassene Spatz	ワルツ	C	3/4	46

※ 小節数は総小節数

ウス２世のモティーフだけで構成したバレエ《ドナウの水の精 *Donauweibchen*》を作曲し、シュトラウスの死後には、遺作バレエ《シンデレラ *Aschenbrödel*》を完成させた。また、1875年からの兵役で、ウィーン第４歩兵連隊、いわゆる「ドイツ騎士団」に所属。同隊は優れた軍楽隊であり、同じ時期にヘルメスベルガー２世もここに属している。

〈ジャワの踊り〉は1890年にアン･デア･ウィーン劇場で初演された《ウィーンのパリ *Paris in Wien*》に使われたバレエ音楽の１曲[5)]。笑劇《ウィーンのパリ》は、パウリーネ・フォン・メッテルニヒ侯爵夫人 Pauline Clémentine von Metternich-Winneburg zu Beilstein（1836-1921）に献呈された。このバレエ音楽は、レーヴィ社から1890年に楽譜が出版されている[6)]。〈ジャワの踊り〉は、3/8拍子ニ短調の主部と2/4拍子ト長調の中間部を持ち、ダ・カーポ後に終結部が付く構成をとる。特定の形式には則っていない。

3.2　アルフォンス・ツィブルカ〈高原の酪農小屋で〉

ツィブルカ Alfons Czibulkaは1842年５月14日キルヒドラウフ［現スロヴァキアのスピシュカー・ノヴァー・ヴェス］生、1894年10月27日ウィーン没。1865年ウィーンのカール劇場第２楽長に就任。当時の楽長はスッペであった。しかし、翌年にオーストリア軍に入り、以後は軍楽隊長として名をなす。入隊時の身分証明書類をスッペが書いている（1866年４月22日付文書A-Wst: LQH0027227）。彼の作品には、軍楽隊が主として演奏する行進曲と舞曲があり、代表作は1880年にベルギーのステファニー王女がオーストリア＝ハンガリー帝国のルドルフ皇太子と婚約した際に、王女に捧げられた〈ステファニー・ガヴォット *Stephanie-Gavotte*〉op.312（1880）である。軍楽の傍ら、1884年にアン･デア･ウィーン劇場で初演された《フィレンツェの聖霊降臨祭 *Pfingsten in Florenz*》をはじめ、６作のオペレッタを作曲している。オペレッタ関連の作品出版でレーヴィ社と取引があった。〈高原の酪農小屋で〉は3/4拍子ハ長調のレントラー。レントラーは緩徐なオーストリアの民俗舞踊である。曲の由来は不明である。

3.3　ヨハン･ネポムク･フックス〈メヌエット〉

ヨハン・ネポムク・フックス Johann Nepomuk Fuchsは1842年５月５日シュタイアー州フラウエンタール生、1899年10月５日ウィーン近郊フェースラウ没。ローベルト・フックスの兄。『音楽の街から』の表紙と目次に記された「ハンス」は、彼の愛称である。1880年ウィーン宮廷歌劇場指揮者、1888年ウィーン音楽院作曲教授に就任。1893年には故ヘルメスベルガー１世 Josef Hellmesberger（1828-93）の後任として、ウィーン音楽院校長になり、数多くの音楽家を指導した。一方、ブライトコプフ Breitkopf & Härtel出版社の顧問として『シューベルト全集 *Schubert Gesamtausgabe*』（1884-97）の刊行を推進した。宮廷歌劇場の副楽長も務め、劇場との関係も深い。「メヌエット」はバロックから伝わるの舞曲で、19世紀には古めかしい様式だが、教育の場では作曲課題として定着していた。収載曲は変ロ長調の主部と変ト長調の中間部から構成される。彼の〈メヌエット〉は緩徐なテンポによる優雅な楽曲である。曲の由来は不明である。

3.4 ローベルト・フックス〈カノン風小品〉

ローベルト・フックス Robert Fuchsは、1847年２月15日フラウエンタール生、1927年２月19日ウィーン没。1875年ウィーン楽友協会管弦楽団指揮者とウィーン音楽院作曲教授に任命され、マーラー、シベリウス、ヴォルフ等を指導した。彼の作品には、ソナタなどの古典的形式の器楽曲が多く、とりわけ「セレナーデ」が人気を呼んだ[7]。彼はベルリンのジムロック出版社をブラームスに紹介した人物として知られ、自作の多くがジムロック社から出版されている。収載曲以外にレーヴィ社から出版された作品はみつからない。一方、ウィーン市立図書館に、シュトラウス２世の遺作〈幻影 *Traumbild*〉をオーケストレーションした手稿総譜が残されている（A-Wst: LQH0262240）。これは、シュトラウス家が長年所持していた楽譜で、親交を伺わせる。〈カノン風小品〉は二部形式の快活な楽曲であるが、厳格なカノンではない。作品の由来は不明である。

3.5 ヨーゼフ・ヘルメスベルガー２世〈子どもたちのガヴォット〉[8]

ヘルメスベルガー Joseph Hellmesberger[9]は1855年４月９日ウィーン生、1907年４月29日ウィーン没。ウィーン音楽界の実力者である父ヨーゼフ１世から音楽を学び、幼い頃から頭角を現す。1867年２月15日には、11歳でウィーン男声合唱協会のリーダーターフェルに出演。同じ演奏会で、シュトラウス２世の〈美しく青きドナウ *An der schönen blauen Donau*〉が初演されている。父は兵役免除を皇帝フランツ・ヨーゼフに願い出るが、皇太子ルドルフさえ兵役についたという理由で却下され、1875年から３年間にわたり「ドイツ騎士団」の軍楽隊で打楽器奏者を務める。前述したように、同隊にはバイヤーも所属していた。1878年ウィーン音楽院作曲教授、1884年宮廷歌劇場バレエ音楽監督に就任。1900～03年にはウィーン・フィルの指揮者を務めた。しかし、1907年の女性スキャンダルにより、順風満帆だった人生は完全に崩れた。代表作は、オペレッタ《すみれ娘 *Das Veilchenmädel*》（1902）、バレエ《イベリアの真珠 *Die Perlen von Iberien*》（1902）で、いずれも『音楽の街から』よりも後に書かれている。

「ガヴォット」は16世紀後半～18世紀後半にフランスで流行した２拍子系の宮廷舞踏で、19世にはほとんど踊られなかったが、シュトラウス２世のオペレッタ《女王のレースのハンカチーフ *Das Spitzentuch der Königin*》（1880）等に用いられ、この時代に一時的に復興した。珍しいことに、〈子どもたちのガヴォット〉では冒頭に2/4と4/8の２つの拍子が並記されている。構成は３部形式である。曲の由来は不明である。

3.6 カレル・コムザーク２世〈ロマンツェ〉

コムザーク Karel Komzákは1850年５月14日バーデン・バイ・ウィーン生、1905年４月23日ウィーン没。父カレル１世（1823-93）も軍楽隊長であった。カレル２世は1869年インスブルックのオーストリア第11歩兵連隊の軍楽隊長に就任し、以後は数々の軍楽隊を指揮した。作品には多数の行進曲、ダンス音楽が存在する。収載曲の他に、レーヴィ社から出版された作品はみつからなかった。ただし、ウィーン市立図書館にローベルト・フックス、ヘルメスベルガー２世に宛てた書簡があることから、彼らと親交があったことは証明され

る[10]。「ロマンツェ」は19世紀に流行した抒情的な器楽曲の形式で、自由な形式が特徴である。冒頭に、「メロディーが浮き上がるように」という指示がある。曲の由来は不明である。

3.7　カール・ミレッカー〈スルタンが来るぞ！〉

ミレッカー Carl Millöckerは1842年４月29日ウィーン生、1899年12月31日バーデン・バイ・ウィーン没。1864年スッペの推薦でグラーツのタリア劇場指揮者に就任。1866年アン・デア・ウィーン劇場指揮者になるが、チャンスを求めて諸劇場を渡り歩いた後、1869年、すなわちマリー・ガイスティンガー Marie Geistinger（1833-1903）とシュタイナー Maximilian Steiner（1830-80）が経営をとる時代にアン・デア・ウィーン劇場に復帰した[11]。1882年にオペレッタ《乞食学生 *Der Bettelstudent*》で大成功を収める。他の代表作は、オペレッタ《ガスパローネ *Gasparone*》(1884)。〈スルタンが来るぞ！〉は、ウィーン市立図書館に自筆譜（A-Wst: LQH0261604）が残されており、「1889年３月28日」の書き込みがある。したがって、1889年の作と断定できる。楽譜冒頭には「行進曲のテンポ Marschtempo」という指示があり、快活で勇ましい曲調である。構成は３部形式である。

3.8　アドルフ・ミュラー２世〈はなむけに〉

ミュラー Adolf Müllerは1839年10月15日ウィーン生、1901年12月14日ウィーン没。アン・デア・ウィーン劇場の楽長ならびに劇場作曲家として偉大であった父アドルフ１世(1801-86）と同じ道を進み、1883年アン・デア・ウィーン劇場楽長に就任。民衆劇を含む多くの劇に音楽を提供するとともに、オペレッタも作曲した。劇場実務に長けた人物で、劇場演奏用の補作にも力を発揮した。現代では、彼が補筆完成させたシュトラウス２世のオペレッタ《ウィーン気質 *Wiener Blut*》(1899）で知られる。〈はなむけに〉はひじょうに短い性格的小品であり、特定の形式には則っていない。手稿譜（A-Wst: LQH0265980）がウィーン市立図書館に残されており、同図書館のウェブ検索表示画面には、脚注として「出版社の書き込みがある」とある。この曲は『音楽の街から』以外に出版された形跡がないことから、手稿譜の書き込みはレーヴィ社の書き込みである可能性が高い。

3.9　ヨハン・シュトラウス２世〈悩みごと〉

シュトラウス２世 Johann Straussは1825年10月25日ウィーン生、1899年６月３日ウィーン没。父ヨハン・シュトラウス１世 Johann Strauss（1804-49）はダンス音楽の流行をとらえ、宮廷舞踏会音楽監督となる。父の死後、地盤を引き継ぎ、ヨハン２世も当初はダンス音楽で名声を得る。やがて劇音楽の分野に進出し、45歳にして最初のオペレッタ《インディゴと40人の盗賊 *Indigo und die vierzig Räuber*》(1871）をアン・デア・ウィーン劇場で初演。ウィンナ・ワルツを採り入れたウィーン・オペレッタの様式を確立する。

シュトラウス２世の作品に関しては、複数の作品目録が存在する。それらを調査すると、〈悩みごと〉はシェーンヘルの目録（SCHÖNHERR 1982）には記載がなく、ヴァインマンの目録では、作品番号のない曲としてだけリストアップされている（WEINMANN 1956: 162)。ケンプの作品表には、作品番号のない曲として２曲、[1]“Problem ?1856 (1892)”、[2]“Problem c1856（1893/94）が記

載されている（KEMP 2001: 486）。［1］は明らかに『音楽の街から』の収載曲であるが、［2］の存在を筆者は突き止められない。そもそも“Problem”が２曲存在したということが疑わしい。

諸作品目録の記載に不明瞭さがある。一方、作品目録以外にきわめて重要な証拠が存在することが判明した。1899年の雑誌*Die Wage*（６月11日号）に、シュトラウスの追悼記事とともに、“Problem”の楽譜が掲載され、次の文が添えられているのである。「このワルツのモティーフはかなり前、シュトラウスがとても若い頃に楽譜商ハスリンガーの所で作られた。当時、リストと親交を温めていたシュトラウスは、リストの傍らでピアノを弾き、［この曲の］調をあてる賭けをした。…このエピソードは、昨年［1898年］、シュトラウスから我々の読者に語られた」[12]（MAILER 2002: 227）。これらを総合するならば、以下の４点が明らかになる。［1］『音楽の街から』に収載された〈悩みごと〉と1899年の*Die Wage*の掲載曲は同一である。［2］〈悩みごと〉はシュトラウスとリストが出会った1856年に作曲された。［3］シュトラウスは晩年もこの曲を忘れなかった。［4］作品目録の編纂者たちは、『音楽の街から』の楽譜と*Die Wage*の“Problem”との照合を実際には行っていないとみなされる[13]。

〈悩みごと〉はイ短調3/4拍子であり、完全終止せずに中途半端に終わる。一般的なワルツが、「序奏- ５つのワルツ-コーダ」の形式であるとすれば、〈悩みごと〉は完全な形のワルツではなく、１曲のワルツに内包される小区分としてのワルツ、すなわち「序奏」に続いて演奏される「５つのワルツ部分」のうちの１つとみなすことができる。

3.10 フランツ・フォン・スッペ〈孤独な雀〉

スッペ Franz von Suppéは1819年４月18日スパラート［現クロアチアのスプリット］生、1895年５月21日ウィーン没。ウィーンの主要な私立劇場、すなわちアン･デア･ウィーン劇場、カール劇場、ヨーゼフシュタット劇場でオペレッタ作曲家として働いた。オペレッタは19世紀中頃にフランスで人気を呼んだ音楽劇のジャンル。ウィーンではオッフェンバック Jaques Offenbach（1819-80）の作品を輸入することで始まった。最初のオッフェンバック作品[14]がウィーン上演されたのは、1858年である。そして1860年11月24日、アン･デア･ウィーン劇場で初演されたスッペの《寄宿学校 *Das Pensionat*》が、ウィーン・オペレッタの第１号となる。その後も、《美しきガラテア *Die schöne Galathée*》（1865）、《軽騎兵 *Leichte Kavallerie*》（1866）、《ボッカチオ *Boccaccio*》（1879）のヒットを生み、ウィーン･オペレッタ「金の時代」の立役者として活躍した。ミュラーとミレッカーは彼の下で働いた経験を持つ。

〈孤独な雀〉は『音楽の街から』で唯一の歌曲。曲種はワルツ・リートに属する。『音楽の街から』には作品の出目に関する情報は何もない。しかし、この曲の単独譜 *“Der verlassene Spatz! Gedicht von F. Radler. Herrn Director Carl Blasel gewidmet.”*[15] が、レーヴィ社から別途出版されており、ここに情報が示されている。作詩者はウィーン市の役人ラートラー Friedrich von Radler（1847-1924）[16]で、同曲は喜劇役者ブラーゼル Carl Blasel（1831-1921）に献呈されている。歌詩は「妻に先立たれ、ひとり残された雀の孤独」を歌っている[17]。一方、被献呈者ブラーゼルは、スッペの《ボッカチオ》（ランベルトゥッ

チョ役）をはじめ、多数のオペレッタ初演に参加し､「カール劇場喜劇三人衆」として人気を博した。単独楽譜のプレート番号(G.L.II.243）から、『音楽の街から』（プレート番G.L.II.600）の出版以前に、すでに同曲が世に知られたことは明白である[18]。

4　1892年のウィーン音楽界

『音楽の街から』の10人の作曲家と収載曲について個別確認してきたが、次に1892年ウィーン音楽界での比較事例について考察する。

4.1　コンコルディア舞踏会

ウィーンでは謝肉祭の期間に多くの舞踏会が開催される。これらの舞踏会には序列があり、19世紀後半にはジャーナリストと作家の協会「コンコルディア」が主催する舞踏会が私的な舞踏会の頂点にあった[19]。コンコルディア舞踏会では、毎年舞踏会委員会が新曲を当時の有名作曲家に依頼していた。1892年の舞踏会は２月22日にゾフィーエンザールで開催。この舞踏会用の新曲リストを**表２**に示す（出典：Neue Freie Presse, 1892年２月17日号)。舞踏会のダンス音楽は、すべてオーケストラで演奏された。

1892年には、12人の作曲家に曲が依頼された。このうち､『音楽の街から』に曲を寄せているのは６人である（**表２**で作曲家名の後に*をつけた)。この新曲リストは、彼らが1892年にこの分野の主要作曲家と認められていた客観的な証拠となる。ただし、留意すべきは、舞踏会用音楽は踊るための実用音楽であり、いわゆる「芸術音楽」の作曲家は舞踏会には関与しなかったであろう点である。

4.2　国際音楽演劇博覧会

1892年の重要な音楽イベントは、「国際音楽演劇博覧会 Internationale Ausstellung für Musik und Theaterwesen」である。５月７日～10月９日までの約５ヶ月、プラーターを会場にして開催された｡「『国際音楽演劇博覧会』では、毎日、博覧会劇場でオペラなどの上演のほか、会場内の諸ホールで演奏会が開催され、パビリオンではヨーロッパ各国の音楽や楽器、さらにはモーツァルト、ベートーヴェン、ウェーバー、マイヤベーア、シューマン、メンデルスゾーン、リスト、ヴァーグナーと

表２　1892年コンコルディア舞踏会の新曲リスト

	作曲家（楽譜の綴り）	曲　名	曲　種
1	Josef Bayer*	Kleiner Anzeiger	Polka Mazur
2	Johann Brandl	Kosakin-Quadrille	Quadrille
3	Karl Komzak*	Tagesneuigkeiten	Polka
4	Eduard Kremser	Vielliebchen	Polka Mazur
5	Carl Millöcker*	Durch und durch modern nach Themen der Operette ‘Das Sonttagskind’	Galopp
6	Adolf Müller*	In vorgrückter Abendstunde	Polka
7	Eduard Strauss	Ball-Kozyphäen	Polka francaise
8	Johann Strauss*	Unparteiische Kritik	Polka Mazurka
9	Franz von Suppé*	Ausgleich	Polka francaise
10	Karl Weinberger	Rundreisebillet	Polka schnell
11	Karl Zeller	Ganz einverstanden	Polka francaise
12	Carl Michael Ziehrer	Ball-ABC	Polka francaise

いった有名作曲家に関する展示が行われた」（若宮 2010: 231）。もちろん、同博覧会では多数の演奏会や劇上演が行われたが、それ以上に新奇な試みであったのは、音楽家の持ち所持品や肖像画、楽譜などを展示し、来場者にみせることであった。1873年のウィーン万国博覧会以後、ウィーンでは数多くの博覧会が開催されてきたが、音楽や演劇を「展示する」試みはそれまでにはなされなかった。発案者は、前年の「モーツァルト没後100年記念音楽祭」に鼓舞されたメッテルニヒ侯爵夫人であり、彼女を中心とする博覧会委員会が急ごしらえで博覧会を計画した。

本稿で示すのは、同博覧会を記念してウィーンのヴァインベルガー Josef Weinberger が刊行した曲集“*Album der Wiener Meister. Eine Erinnerung an die Internationale Ausstellung für Musik und Theaterwesen in Wien 1892*”である。『ウィーンの巨匠たちのアルバム』というタイトルに、「1892年ウィーンの国際音楽演劇博覧会の思い出」という副題が添えられている。中身は12人の作曲家による声楽曲（合唱を含む）またはピアノ曲である。収載曲を**表３**に示す。このうち、『音楽の街から』に曲を寄せているのは４人である（**表３**で作曲家名の後に*をつけた）。

この曲集は、明らかに博覧会関連商品である。博覧会を訪れた人たちに、記念もしくは土産として販売する目的で編纂された。だから大曲ではなく、購入者が演奏できる程度の曲が収められている。収載作曲家は、劇音楽、娯楽音楽の作曲家ばかりでなく、ブラームス、ブルックナーといった芸術音楽の作曲家も含まれる。その意味では、ウィーン音楽の硬軟を織り交ぜた曲集に位置づけることができ、曲集自体が博覧会的性格を持つ。ただし、同曲集に収載された楽曲の作曲年代にはかなりの幅がある。最新の曲もあれば、古いものもある。古い例をあげるならば、第10曲のシュトラウス“*Sinngedicht*”が好例である。これは1844年作の作品番号１、つまりは半世紀前の彼の最初の作品である。シュトラウスの原点を示した点に博覧会的な意味が認められる。曲集の装丁は一般的であり、格段に装飾的ではない。

表３ 『ウィーンの巨匠たちのアルバム』の収載曲

	作曲家	曲　名	曲　種
1	Johannes Brahms	Es rauschet das Wasser	二重唱
2	Anton Bruckner	Vexilla regis	合唱
3	Ignaz Brüll	Gute Nacht	歌曲
4	Robert Fuchs*	Capricetto	ピアノ曲
5	Carl Goldmark	Ländlisches Bild	ピアノ曲
6	H. Grädener	Träumerei	ピアノ曲
7	Richard Heuberger	Die Augen spotten mein: Mutter	歌曲
8	Carl Millöcker*	Serenade	ピアノ曲
9	Hugo Reinhold	Menuetto	ピアノ曲
10	Johann Strauss*	Sinngedichte	ピアノ曲
11	Franz von Suppé*	Waldblume	歌曲
12	Carl Zeller	Niedlich Schätzchen, feines Kätzchen	歌曲
13	Julius Zellner	Notturno	ピアノ曲
14	C.M.Ziehrer	Jungfer Toni	ピアノ曲

5 『音楽の街から』の成立背景

1892年のウィーン音楽界を概観したところで、『音楽の街から』に話を戻す。この楽譜の成立事情を史料から客観的に証明することはできない。したがって、副次的な状況証拠を積み上げて論を構築する。10曲の収載曲のうち、史料が残されているのは5曲であった。このうち、スッペの〈孤独な雀〉は、同じレーヴィ社からそれまでにもいくつかの楽譜として出版されている事実がわかった。同じ版(G.L.II.243)を別シリーズに再利用していたにもかかわらず、『音楽の街から』では新たな版(G.L.II.600)が彫られている。それは、『音楽の街から』では古い版の使いまわしができなかった事情を示唆している。両版の違いは、『音楽の街から』の曲名と作曲者名にデザインが施され、肖像画付きで飾られている点である。つまり、『音楽の街から』は装飾的な装丁が大きな特徴のひとつである。

次に、レーヴィ社が手持ちの曲をかき集めて、『音楽の街から』の曲集を仕立てのかを考えてみる。[1] ウィーン市立図書館に所蔵されているミュラーの〈はなむけに〉の手稿譜に出版社の書き込みがある。[2]『音楽の街から』以外に〈はなむけに〉が出版された形跡はない。以上の2点から類推するに、『音楽の街から』の制作にあたって、レーヴィ社は作曲家から曲の提供を受けたと推察される。それが新作か否かは別の話であるが、著作権が確立しつつあった19世紀末に、作曲家の了承のない出版は難しかったはずである。

そうであるとすれば、シュトラウスの楽曲として1850年代の古い作品を持ち出してきた事情を考えてみたい。1892年はシュトラウスにとって大事な年であった。ダンス音楽家から劇音楽家に転身しつつも、それまで郊外の私立劇場で上演されるオペレッタしか手がけたことがなかった彼に、チャンスが訪れたからである。1892年1月1日、彼は初めてのオペラ《騎士パースマーン *Ritter Pásmán*》を宮廷歌劇場で初演する。宮廷歌劇場に掛けられるオペラ作曲家に名を連ねることは、ウィーンの劇音楽作曲家にとって最大の名誉であった。しかし、作品の評判は芳しくなかった。作品の出来はオペラの楽譜販売に直の影響を与える。そのため、シュトラウスは当時契約を結んでいたベルリンのジムロック社と、オペラの楽譜販売をめぐって衝突を繰り返していた。その仲介者として何度も名前がでてくるのが、グスタフ・レーヴィである。レーヴィはシュトラウス2世の子ども時代の学校の同級生であり、1892年当時に出版契約こそ結んでいないが、シュトラウスのエージェントとして立ち回っている。2人の頻繁な書簡のやりとりがMAILER 1996で公開されている[20]。つまり、シュトラウスとレーヴィは親密な関係にあった。

レーヴィが『音楽の街から』の制作を始めた時期は判明しないが、ライプツィヒの楽譜商ホフマイスターの販売目録が1892年5月に既刊であったことを証明する(HOFMEISTER 1892: 185)。1892年5月はまさに「国際音楽演劇博覧会」が開幕した月にあたる。博覧会の開幕にあわせて『音楽の街から』は準備されたと筆者は考えている。前にも述べたように、メッテルニヒ夫人が博覧会を着想したのは1891年11年の「モーツァルト没後100年祭」以後である。それまでは、「音楽の博覧会」という発想自体が生まれていなかった。1891年末のシュトラウスは、オペラの準備に忙殺され、年明けのオペラ初演後は、オペラの失敗

を取り戻すことに全精力を注いでいる。「国際音楽演劇博覧会」の開幕式にワルツ〈もろびと手をとり *Seid umschlungen Millionen*〉op.443を作曲したのは事実であるが、同博覧会に対する関心はきわめて低く、このワルツをめぐってもトラブルを起こし、開幕式には出席もしていない。ただし、その件についてはすでに拙稿で論じたので、ここでは詳述しない（若宮 2010: 231-233を参照）。

一方、レーヴィは商売の好機を逃さなかったのであろう。『音楽の街から』は装飾的装丁の「みせる曲集」を指向していて、博覧会的性質を示している。収載されたシュトラウス作品がかなり昔の楽曲であるのは、[1] 当時のシュトラウスはオペラで頭が一杯で、新曲を作曲する余裕がなかった、[2] おそらく親しいレーヴィが、出版されていない昔の曲の存在を知っていたからと考えられる。その証拠に、レーヴィは1881年にシュトラウスの６歳の時の楽曲〈最初の楽想 *Erster Gedanke*〉を出版している[21]。『音楽の街から』の制作にあたり、再度、昔の小曲を提供してもらったのであろう。このことは、シュトラウスにとって記録に留めるほどの意味も持っていなかったと推測される。

この他にも、『音楽の街から』と国際音楽演劇博覧会との関連を示す手掛かりはある。そのひとつは、博覧会主催者であるメッテルニヒ夫人に献呈された曲、すなわちバイヤー作曲の〈ジャワの踊り〉が収載曲に選抜されていることである。これは、メッテルニヒ夫人に対する敬意の表れである。もうひとつは、ラートラー作詩の歌曲が選ばれていることである。「国際音楽演劇博覧会」の名にふさわしい偉大な詩人の詩による歌曲も選択可能であったはずである。それにもかかわらず、役人ラートラーによる、物悲しい内容の歌が選ばれている。それは、ラートラーが国際音楽演劇博覧会に常設された「ハンスヴルスト劇場」の責任者であったことに関係すると考えられる。ハンスヴルストは18世紀初頭にシュトラニツキー Josef Anton Stranitzky（1676-1726）によって創出された「道化のキャラクター」である。オーストリアでは誰もが知る道化役、ハンスヴルストが登場する劇をラートラーは博覧会の「ハンスヴルスト劇場」のために何作も執筆している。したがって、ラートラーの曲を選んだことは、彼に対する敬意の表明であろう。

かくして、わずかな手掛かりからも『音楽の街から』と国際音楽演劇博覧会との関連は、浮かび上がってくる。史料から、全収載曲の由来を突き止めるには至らなかったが、1892年のコンコルディア舞踏会、博覧会記念曲集『ウィーンの巨匠たちのアルバム』にも重複して曲が収載された作曲家が10人中７人にのぼる。とりわけ、スッペ、シュトラウス、ミレッカーは、２つの曲集と舞踏会リストのすべてに名を連ねており、後年ウィーン・オペレッタの「金の時代の三大星」（LINHARDT 2004: 232）と崇めたてられる雄姿を示している。『音楽の街から』だけに曲を寄せている３名のうち、J.N.フックスはウィーン音楽教育界の頂点にあり、ツィブルカは軍楽、ヘルメスベルガーは劇場や演奏会でマルチな活動をしていた。そう考えるならば、この曲集に選ばれた10人が、当時のウィーンを代表する劇音楽、ダンス音楽、軍楽の作曲家であった点は確かである。レーヴィは彼らとの交渉を経て、博覧会的曲集の刊行にこぎつけたと考えられる。さらに付け加えるならば、この曲集に「芸術音楽」の大作曲家作品は含まれて

おらず、ウィーン庶民が好んだ軽妙な音楽が集められている。人選にはレーヴィの志向と人脈が反映されていると考えられる。

6　結論

『音楽の街から』は、19世紀末ウィーンで活躍した10人の作曲家の小曲を集めたピアノ曲集であった。これは純粋な「演奏のための曲集」ではなく、メッテルニヒ侯爵夫人が提唱した「音楽の博覧会」という理念に沿う「博覧会的曲集」であった。「音楽の博覧会」の理念の下では、音楽を「物」として取り扱う考えが生まれた。博覧会を訪れた庶民は、音楽に関する展示をみて、音楽を物品として家に持ち帰ることが可能になった。「楽譜」はその最たるものであった。ここでの「楽譜」は演奏補助の役目を離れて、「土産物」という性格を帯びた。持ち帰った「楽譜」は家で演奏して楽しむこともできたし、さらなる誰かへの「土産」にもなった。そして装丁が美しければ、演奏できない人でも楽譜を飾って観賞することができる。そのために、意匠を凝らしたデザインと肖像画は欠かせないものであったはずだ。小曲が集められたのは、『ウィーンの巨匠たちのアルバム』の箇所でも述べたように、「素人が演奏できる」というコンセプトが第一義にあるからである。しかし、ページをめくればすぐに美しく飾られた部分が目に付くように、あえて小曲が連ねられたという側面もあろう。レーヴィ社の『音楽の街から』は、ヴァイベルガー社の『ウィーンの巨匠たちのアルバム』よりも装飾的である。しかも、高価で豪華ではなく、廉価で見栄えのよい商品に仕上がっている。「音楽の博覧会」という理念は、さらに次元の進んだ楽譜の消費時代を導いたといえる。『音楽の街から』はその先駆である。ただし、楽譜消費の時代は長くは続かなかった。録音技術の進歩により、楽譜が担ってきた音楽ビジネスにおける地位は、根底から覆えされるからである。それでも19世紀末のピアノ曲集『音楽の街から』は、当時の音楽配信に類する立場にあった。

[注]

1）1892年５月の目録に２手用ピアノ曲の楽譜として掲載（HOFMEISTER 1892: 185）.

2）詳細については、若宮 2011: 161-162を参照。

3）描かれている花の名前すべてを同定できないが、第２曲がオーストリアの国花「エーデルワイス」、第５曲が「すずらん」であることは判別できる。描かれた花と曲には、何らかの関連性があると推定することができる。

4）価格は２クロイツァーであった（HOFMEISTER 1892: 185）。

5）《ウィーンのパリ》のバレエ音楽は〈ジャワの踊り〉のほか、“Gavotte”, “Spanischer Tanz”, “Drachen Marsch”, “Fontaine-Walzer”の５曲から構成される。

6）プレート番号はG.L.II 463。

7）〈セレナーデ *Serenade*〉は５曲現存。第１番（1874）が最も有名。

8）同曲は、筆者の楽譜提供により、英国ヨハン・シュトラウス協会がオーケストレーションをして、CD化する計画が進行中である。

9）『音楽の街から』では、Josefと綴られている。

10）ヘルメルベルガー宛の書簡（1899年10月10日付, A-Wst: LQH0086518）、フックス宛の書簡（1899年11月27日付, A-Wst: LQH0072103）。

11）彼らの経営時代は1875年まで。この時代にシュトラウスの初期オペレッタも同劇場で上演された。

12）さらに、「1898年３月28日」と書き込まれた自筆譜が存在すると書かれている。

13）MAILER 2002で*Die Wage*の記事に触れたマイラーは、この事実に気づいていた。

14）1858年10月にカール劇場で上演された“*Hochzeit bei Laternenschein*（原題：*Le Mariage aux Lanternes*）”。

15）楽譜はオーストリア国立図書館に所蔵されている（A-Wn: MS4537-4° /19, 59）。

16）ラートラーは、1887年４月30日にヨーゼフシュタット劇場で初演された音楽肖像劇“*Joseph Haydn*”など、数作のスッペ作品の台本作家を務めた。

17）「彼はアスターの木の上にとまり、遠くを眺めている。そして妻を悼み嘆いている。心が沈み、恋しさが募る彼には太陽や木のやさしさ、そして歌が慰め。彼女をとても好きだったから。彼は自分に向かって静かに同じ歌をさえずり続ける。取り残された、かわいそうな雀」。

18）同じプレートをレーヴィ社は、“*Neue Sammlung Beliebter Lieder und Theater Couplets mit Begleitung des Pianoforte.*”というシリーズ第18番に再利用している。

19）公式舞踏会の頂点は皇室舞踏会。同舞踏会は皇室舞踏会音楽監督がすべてを取り仕切った。同監督は1863-70年ヨハン２世、1871-1901年弟エドゥアルトが務め、19世紀後半にはシュトラウス家が独占していた。

20）レーヴィは、オペラの外国上演を画策し、窮地を打開しようとしていた。

21）1881年にシュトラウスが契約を結んでいた出版社はハンブルクのA.Cranzであった。〈最初の楽想〉は作品番号のない曲としてレーヴィ社から出版。出版責任者は当時の妻リリAngerika“Lili”Strauss（1850-1919）の名であり、純益は「病気の子どものための貯金助成協会」に寄付された。この曲の真作性は、1898年にシュトラウス自身が保証している（MAILER 1999: 91）。

[Library Sigla]

A-Wn Österreichische Nationalbibliothek, Musiksammlung. Wien, Austria.

A-Wst Wienbibliothek im Rathaus. Wien, Austria.

[参考音源]

『*Aus der Musikstadt* ～音楽の街から～』（日本ヨハン･シュトラウス協会2012年３月例会レクチャー・コンサートのライブCD）ピアノ演奏: 前田拓郎. 東京：日本ヨハン･シュトラウス協会.

[参照新聞]

A-Wn: “ANNO［AustriaN Newspaper Online］= Historische österreichische Zeitungen und Zeitschriften”（http://anno.onb.ac.at/）で閲覧。*Neue Freie Press; Wiener Zeitung.*

[参考文献]

ANZENBERGER, Friedrich

2000 *Alfons Czibulka. Militärkappelmeister und Komponist.* Wien: Wiener Stadt- und Landesbibliothek.

ARNBORN, Marie-Theres; CLARKE, Kevin; TRABITSCH, Thomas（ed.）

2011 *Welt der Operette.* Wien: Österreichisches Theatermuseum.

BRANSCOMBE, Peter

2001 “Müller, Adolf”, *in* SADIE 2001, vol.17: 372-393.

BLOM, Eric; 鍵山, 由美［若宮, 由美］（訳）

1996「バイヤー , ヨーゼフ」*in*『ニューグローブ世界音楽事典』東京：講談社. 第12巻, p.498.

CHRISTIANSEN, Paul

2001 “Komzák, Karel（ii）”, *in* SADIE 2001, vol.13: 771.

FINSCHER, Ludwig（ed.）

1994-2008 *Die Musik in Geschichte und Gegenwart.* 21 Bände. Kassel: Bärenreiter.

GABLER, Anton

2010 *Karel Komzák.* Wien: Institut für Musikwissenschaft.

GASCOMBE, Stanley

2008 “The Family Hellmesberger（1800-1940）”, *in*

VIENNA MUSIC, No.96. London: The Johann Strauss Society of Great Britain, pp.19-22.

HOFMEISTER (ed.)

1892 *Musikalisch-literarischer Monatsbericht.* Leipzig: Hofmeister. http://www. hofmeister.rhul.ac.uk/2008/content/database/database.htmlで 閲覧.

KEMP, Peter

2001 “Strauss”, *in* SAIDIE 2001, vol.24: 474-496.

LAMB, Andrew

2001 “Czibulka, Alphons”, *in* SADIE 2001, vol.6: 827.

2001 “Millöcker, Carl”, *in* SADIE 2001, vol.16: 698-699.

LINHARDT, Marion

2002 “Hellmesberger”, *in* FINSCHER 1994-2008, Personenteil Bd.8: 1259-63.

2004 “Millöcker, Carl”, *in* FINSCHER 1994-2008, Personenteil Bd.12: 228-234.

2006 “Strauß”, *in* FINSCHER 1994-2008, Personenteil Bd.16: 11-54.

LITTLE, Meredith Ellis

2001 “Gavotte”, *in* SADIE 2001, vol.9: 591-593.

MAILER, Franz

1996 *Johann Strauß(Sohn). Leben und Werk in Briefen und Dokumenten.* Bd.6: *1892-1893.* Tutzing: Hans Schneider.

1999 *Johann Strauß. Kommentiertes Werkverzeichnis.* Wien: Pichler.

2002 *Johann Strauß(Sohn). Leben und Werk in Briefen und Dokumenten.* Bd.9: *1898-1899.* Tutzing: Hans Schneider.

OBERZAUCHER, Alfred

1999 “Bayer, Josef”, *in* FINSCHER 1999. Personenteil Bd.2: 551.

SADIE, Stanley (ed.)

2001 *The New Grove Dictionary of Music and Musicians.* 2nd ed. 29 vols. London: Macmillan. Vol.24: 474-496.

SCHÖNHERR, Max

1982 *Lanner, Strauss, Zieler.* Wien, München: Doblinger.

若宮, 由美

2010「ヨーゼフ・バイヤー作曲のバレエ《ドナウの水の精》: ヨハン・シュトラウスのモティーフとの関連」*in*『埼玉学園大学人間学部紀要』第10号. pp.231-243.

2011「ヨーゼフ・バイヤー作曲のバレエ《ウィーン巡り》(1984) ―ヨハン・シュトラウスの位置づけ―」*in*『埼玉学園大学人間学部紀要』第11号. pp.157-169.

2012「Aus der Musikstadt 曲目解説」*in*『*Aus der Musikstadt* ～音楽の街から～』, pp.2-6. 東京: 日本ヨハン・シュトラウス協会.

WEINMANN, Alexander

1956 *Verzeichnis sämtlicher Werke von Johann Strauß Vater und Sohn.* Wien: Musikverlag Ludwig Krenn.